

No.33

すいはく 博物館だより

平成20年(2008年)度 春季特別展

西村公朝—たどり来し道—

平成20年4月26日(土)～6月22日(日)

—西村公朝の祈りの世界 吹田市立博物館で再び—



三十三間堂にて

平成17年度秋季特別展「西村公朝 祈りの造形」では、仏教美術に独自の世界を築き上げた西村公朝の仏像や仏画、土^{つち}仏^{ぼつ}や陶^{とう}仏^{ぶつ}などの工芸品を紹介しました。ご観覧いただいた方々から、暖かな温もりや心の安らぎを感じた、仏像がとても身近なものに思えた、などの感想を数多く戴きました。

当館では、この春再び西村公朝の作品を展覧する「西村公朝—たどり来し道—」を開催します。今回は彫刻作品を中心に、美術院時代の仏像修理ノート、著書原稿やイラストなど、多彩な作品と資料で、西村公朝の生涯の歩みをたどっていきます。仏像には、“慈悲”の表現こそが大切であるという信念のもと、独創的な仏像造りに最期まで挑み続けた西村公朝。その慈愛に満ちた豊饒^{ほうじょう}な祈りの世界をお楽しみいただきたいと思います。

西村公朝を語る

美術院国宝修理所常務理事 小野寺久幸

1929年生まれ。宮城県出身。昭和26年より仏像修理に携わり、昭和30年に美術院入所。昭和50年財団法人美術院国宝修理所所長及び理事就任。平成3年東京芸術大学美術学部客員教授（保存技術）就任。平成12年財団法人美術院国宝修理所常務理事就任。東大寺大仏師、紫綬褒章、旭日小綬章ほか受章。

－昭和30年代初頭の美術院の出張修理－

美術院は、当初京都・奈良と東京の三カ所に修理所があって、僕はその東京のグループに所属していました。それが昭和30年に一緒になって、昭和31年に西村先生と一つのチームを組んで高松の香西寺に出張したんです。僕は28、9歳で、西村先生は40代初め頃。一回り違うんですけど、兄貴みたいな感じなんです。当時僕が一番若くて、その次に西村先生が若かったんですね。西村先生はこの現場で責任者だったんですけど、そういうことを感じさせない。ふつうは責任者とその下

の使用されている者というのは、全然意識が違うわけで、そこには線引きされたものがあるのですが、それが全くないんですよ。

この頃は、出張すると三ヶ月も四ヶ月も帰れないんです。家に帰るのは盆暮れとか、お正月しか帰らないような仕事で。それで、時間のあるときは、歩いて行ける範囲でその土地の観光と見学をしてました。見学というのは即、勉強ですからね。お寺の立地とか、いろんなこと聞いたり、パンフレットを貰って読むとかね。もちろん海にも行ったし山にも入ったし。遊ぶんでも、ただ行って眺めてくるだけじゃなしに、心に残る何かを求めて遊びに行った。これは西村先生のおかげだと思ってますね。普通はせっかく遊びに行くのに、かえって疲れるじゃないのってなりかねないんですが、それを遊びながら楽しみながら勉強しようって、そういうことを率先してやってた。この昭和31年頃にはすでに西村先生は得度していて、お寺にお参りするというと、門の前でお経をあげ始



高松の香西寺にて（昭和31年12月）
左より小野寺久幸、藤村安蔵、西村公朝

西村公朝（1915－2003）略歴

大正4年大阪の摂津富田に生まれる。昭和15年、東京美術学校（現・東京芸術大学）彫刻科を卒業。昭和16年、美術院国宝修理所に入り、三十三間堂の千体千手観音菩薩像など国宝・重要文化財約1300体の仏像の修理に携わる。昭和27年に得度して天台宗僧侶となり、同30年京都愛宕念仏寺の住職となる。昭和42年から58年まで東京芸術大学教授、昭和61年同名誉教授となる。同年天台大仏師法印号を受け、翌62年延暦寺戒壇院の本尊釈迦如来坐像を造立。数多くの仏像制作を手がけ、なかでも目の不自由な人たちが自由にふれることができる「ふれ愛観音」は有名で、愛宕念仏寺や延暦寺・清水寺など約60カ所に祀られる。昭和20年に吹田市長野東にアトリエを構える。平成4年から15年まで吹田市立博物館館長を務める。平成15年12月逝去。



牡鹿給分浜にて（昭和33年11月）
左より小野寺久幸、西村公朝、酒依清太郎

めて、それを回りの人が不思議がってね。本人は「お経を知らない坊主だ」と言ってましたけどね。

—西村公朝の人柄—

西村先生は、今で言えば靈感のようなものがあるって、自分のことでなくても、ほかの人が体験したことでも信じるんですね。誰もそんなのあり得ないとか、嘘だといっても、本人は、「そんなふうに思わへんのか」って言って、それで終わりなんです。逆らわない。それ以上深入りするとバカバカしいっていうか、多勢に無勢で負けるんです。そういうのは、初めから相手にしなきゃいい、聞き流すっていうか、それはうまい人でした。

ただこのことについてはちゃんと教えておかなきゃいけないという事柄については、西村先生もしつこく言うんですよ、こっちが納得するまで。でも、言ってもしょうがないと思ったら、「あ、さよか」で終わりなんです。それ以上言わないんですよ。非常に人当たりがいいというか、人とぶつかっても痛さを感じない人でした。だいたい人間というのは、どっかでぶち当たったり議論したりすると、腹が立ったりするでしょ。次の日になっても悔しいなと思ったり、おさまらんかったりするんですよ、感情的に。それがないんですね、まろやかなんですよ。人間というのは、強くいくとかえって抵抗される、かわすことによって、むしろ納得させる。自分のふり見せて直させるわけです。西村先生はそういう気持ちを生涯を通して持ち続けたんじゃないでしょうか。だから、お

そらく怒られたってというような感触を持った人は、いないんじゃないでしょうか。

—修理技法の教え方—

西村先生は、師匠であり兄貴であり、親父であり、というような感覚でずっとやってきました。普通は師匠とか先輩というのは、一緒に仕事すること自体が緊張したり、窮屈だったりするんですが、それがありません。

教えるにしても、言葉じゃなくてやって見せて教えるんですよ。玄翁^{げんのう}なり鑿^{のゐ}を貸してって言って、ババババツとするんです。それで「こんなもんだ」とすぐにひいてしまうんですね。結局言葉では伝わらないです。特に彫刻なんかは、物差しってどこにもなくて、感覚で彫っているわけですからね。だから、教える方も何にも言わず、いちいち理屈っぽく言う必要はないんですよ。言葉で言って、自分の思っていることが相手に伝わらないと、また言わんならんし、何遍も何遍も言っても結局最後はわからんままとなるわけですよ。それよりは何も言わんと、見せたほうが一回で終わりますよね。ですから指導というのはね、手取り足取り教えるわけではなくて、その姿を見て教わるものだと、今でも思っていますよ。

それと西村先生は、ノートをとるのがうまかった。講義を聴きに行っても西村先生のノートが正確なんで、それを見せてもらってもう一度書き写して勉強していました。出張先では、余暇でも夕方



出張先にて（昭和30年代中頃）



左 西村公朝、右 小野寺久幸（昭和40年代中頃）

ご飯済んだあとでも、仏法の話をしてもらったり、美術の話よりもむしろそういう話のほうが多かったですね。美術は自分で練習しなさいって言うんだね、美術は自分の専門、本分ですから。仏法というのはまた別の道ですので、わざわざ仏教の本を読んだり、仏教の法話を聴きにいかなくても、西村先生がいろいろと話をしてくれました。

—西村公朝の仏像—

西村先生は若い頃から常に、自分で宝物を探してどんどん入っていく、そして今度は宝物を出して与えていく、そういうことを繰り返して歩いてきたんだと思うんですね。その中には仏像に携わる専門の人もいれば、一般の人もいる。専門の人じゃなくても、それ相応に宝を見せてやるということをしてきたんじゃないかと思います。その一方で、自分の天職である作家としての本分を出しきろうとした。やっぱり創作っていうのは大変なものなんですよ。仏師達は修行時代、模写、模造から始まるんですが、なかなか自分のものがつかめない。どうしても古い人の真似、模倣のままなんです。そこから抜け出せないで終わってしまうのが大方なんです。そこから抜け出して独自の仏像を築き上げたのが西村先生だと思います。

十大弟子の最後の一体は、「ほんとうに

息も絶え絶えだった。息子の力でもってやってくれた」と本人も言ってました。「十大弟子の完成を見たい」、その最後の執念で成し遂げたっていう精神力、それはすごいと思いますね。十大弟子は、一般の素人から見ると完成したようなしないような、彫りきれずに仕上がらないで終わったように見えるわけですね。なかなかあれで仕上げって言えないですよ。どうしても、鑿入れすぎなんです。そこで止めるっていう、ある程度のところで自分の見極めが大事なんですよ。自分が納得して「これが完成だ」というところが完成なんです。

西村先生が若い頃、三十三間堂の修理のときに、「どのへんまで行ったときに完成ですか」、と先輩に聞いた。そしたら、「これ以上手を入れることはできない。これ以上手の施しようがないというときに完成だ」と言われた。ならば、「その手の



自宅アトリエにて阿難像を彫る西村公朝（平成6年）



制作中の阿難像

施しようがないというのはどういうところか」と理屈っぽく聞くと、「それは自分の見極めで、自分の経験とか自分の能力によって、そこで完成だと決断したところ、それが完成だ」と言われた。そのとき、「なるほどそうだな」と思ったと、晩年になって話してました。まさに西村先生の作品は、「これが完成なんだ」ということを、作品そのもので言っているわけですね。だけど、それを見た人が、「違うよ、もっと手が入るじゃないか」と言うんだけど、いや、入らないですよ。そこまですずっと彫り込んで彫り込んで、鑿がそこまで行って、止まってるんです。それが粗彫りあらぼなんですよ。仏像はひらめきの中で完成する。それは何時間も持続しないんで、短時間のうちに形にしようという作品ですよ。ある刹那せつなっていうか、そのときひらめいたのを一気に彫り上げる、刹那刹那で決まってくるようなね。

—西村公朝と円空—

修理はじっくりと腰を据えて寸分違わず行う、自分の考えで曲げることはできない。だけど、作品は自分の意のままにできるものです。ですから、じっと見ておって、その刹那、自分はこの仏がこういうふうに見えたというのを彫り上げていくわけです。木の切れ端だったり、石だったり、いろんな材料が仏になるわけですからね。西村先生は、それを見極める感覚とひらめきの鋭い人でした。それは一種独特の世界に少し入っていった、ある種の思想的なものがあるんじゃないかと思います。そういう意味では、円空えんくうなんかと共通点が

ありますよ。坊さんであって、仏像を十万体だか何万体だか願をかけて彫るという、その執念みたいなもの、そういう生き様みたいなものに、感銘を受けた面があったのではないのでしょうか。作品そのものの影響ということではないんですが、心で彫ってる仏という点ですね。西村先生が若い頃にしばしば言っていた、いわゆる感得仏かんとくぶつです。あの蔵王権現ざおうごんげんも、役行者えんのぎょうじやの感得仏ですからね。円空の仏像は上半身が如来で、下が菩薩みたいな、なんかバランスがとれない儀軌ぎぎに外れているのはたくさんあります。でも、西村先生のは儀軌にかなっていて、基本を守った中で自分の気持ちを出そうとして完成させている。ですから、ほかの人とは違う独特のものですよね。作るのも早いんです。イメージがもうできていて、それを形に表す。万物に仏をみ観い出し、即座に表現しているんですね。西村先生の作品は、その年代、その刹那ごとの西村公朝の生きた証であり、生き様を映したものだと思います。若い頃から晩年までの作品を通して見るとそれがよくわかるんじゃないでしょうか。



十大弟子 論議第一 迦施延

西村公朝さんのこと

前岐阜県美術館館長、前岐阜県ミュージアムひだ館長
円空大賞展選考委員

平光明彦

西村公朝さんに初めてお会いしたのは35年ほど前のことであり、当時、日本美術院国宝修理所にいらっちゃって、仏像修復の第一人者であった。仏像修理の現場を拝見するためにお邪魔したのだが、公朝さんは何も知らない私のような若僧を優しくこやかに迎えてくださった。仏像修理という未知の世界を垣間見ることが出来、多くのことを教えられたのはもちろんのことだが、そこで働く若い仏師達の真剣な、それでいながらどこか柔和な眼差しに強く心惹かれた思い出がある。優しく迎えてくださった時の公朝さんの眼と若い仏師達の眼—そこに私は、ほんものを求め、真剣に取り組んでいる人の心の大きさと豊かさを実感させられた。こんな貴重な体験をした後、私は美術館の仕事に移り、近・現代の美術に関わるようになって古美術の世界からは疎遠になってしまい、公朝さんのこともいつしか記憶がうすらいでしまっていた。

それから二十数年の時が流れ、平成11（1999）年、岐阜県では、21世紀の新しい時代は、これまでの経済的な豊かさもさることながら、心の豊かさを得ることが本当の豊かさだと唱え、円空大賞を制定した。円空は岐阜県に生まれ没した江戸初期（1632-95）の修験者（しゅげんじゃ）で全国を遊行（ゆうぎょう）し、生涯に十二万体の造仏（ぞうぶつ）を発願（はつがん）し、各地にある独創的な円空仏を遺した。

この賞の選考にあたっては梅原猛選考委員長のもと、「円空のように土着の伝統に根ざしながら独創

的な芸術を創造している芸術家を顕彰する」という視点を持って選考が進められた。各選考委員の推薦などによる作家百数十名の中から回を重ねて絞り込みが行われ、最終的には10作家の中から円空大賞（1名）、円空賞（5名）を選考することとなった。その中でひととき異彩を放っていたのが西村公朝さんだった。私の心のなかでふと若き日に会ったあの優しくふくよかな眼差しのことが懐かしく蘇った。

公朝さんの慈愛とユーモアに満ちた仏像彫刻とともに京都愛宕念仏寺の住職として五百羅漢（ごはくわん）の石仏制作の指導（1981-91）や長年にわたる人々への仏教伝道などが総合的に評価され、各選考委員異存なく第1回円空大賞に推挙された。平成12（2000）年6月に授賞式が挙行政され、式典の後、記念トークが開かれたが、公朝さんは「円空の仏像制作は、鉋彫（なたぼ）りとかいろいろ言われているが、多くの部分は昔の今では余り見られないチョウナによる刀痕（とうこん）だ。」と語られたことが強く心に残っている。この時の公朝さんの眼には長年仏像制作に携わってきた人の強い信念が光って見えた。



岐阜県の円空大賞について

岐阜県ミュージアムひだ 学芸員 南本有紀

岐阜県では県ゆかりの江戸時代の修業僧・円空（1632—1695）を顕彰し、地域の文化・芸術振興による「ふるさとの誇り」や「心の豊かさ」が実感できる地域社会の創造を目的に、伝統に根ざす独創的な活動を行っている芸術家を表彰する「円空大賞」を制定しています。ひとことでいえば「円空のような」芸術家に贈る栄誉賞です。

1999年に創設されたこの賞では、これまでの4回で、5ヶ国26人のアーティストに授賞してきました。対象は、とくに分野や国籍等を定めていません。立体造形・絵画・映像等々のさまざまな分野で、円空精神、つまり、「土着性」を兼ね備えた「創造性」と「慈愛の心」に通じる業績を残してきた芸術家を、選考委員の互選で選んでいます。円空仏のイメージが強いせいか、木彫を得意とする造形作家が選ばれる傾向がありますが、ときには、染色家（第3回円空大賞・三浦景生氏）や舞台作家（同円空賞・堀尾幸男氏）が受賞しています。陶芸家が多いのも、美濃焼の本場という土地柄でしょうか。

こうした過去の受賞者の顔ぶれを見ると、円空と円空仏のイメージが自ずと浮かび上がってきます。「現代によみがえった21世紀の円空」たちのそれぞれに独自の創作活動が、ひとりの偉大な人物を彷彿とさせるのは興味深いことです。その第一号、記念すべき第1回円空大賞を受賞した西村公朝氏には、特にその特徴が顕著に感じられます。鑿痕を残す融通無碍で大胆な刀法だけでなく、芸術家であり、宗教家としてあったその人生そのものが円空にびたりと重なるからです。

平成20年(2008年)度春季特別展

「西村公朝—たどり来し道—」関連イベント

シンセサイザー演奏会

4月27日(日) 午後2時～

「祈りの調べ」

演奏 愛宕念仏寺住職 西村公栄氏

講演会

5月11日(日) 午後2時～

講演「西村公朝感得の像」

講師 (財)美術院常務理事 小野寺久幸氏

6月1日(日) 午後2時～

講演「西村公朝のたどり来し道」

講師 宝塚造形芸術大学教授 西村 公泉氏

6月21日(土) 午後2時～

講演「西村公朝先生と清水寺」

講師 清水寺貫主 森 清範氏

演奏会・講演会は、博物館講座室

当日先着120名 聴講無料

連続講座「仏像入門」

5月1日・8日・15日・29日・6月5日・12日

の木曜、午後2時～

飛鳥・白鳳時代から鎌倉時代までの仏像を学ぶ6回連続の講座。

講師 当館学芸員 滝沢幸恵

申し込みは、はがきまたはFAXに講座名と住所・氏名・年齢・電話番号を書いて博物館まで。受講無料。定員50名。申込締切4月18日(金)必着。多数抽選。



「たどり来し道」見学会

5月21日(水)・6月8日(日)

午前9時～午後4時

西村公朝の足跡を訪ねるバスツアー。京都の三十三間堂と愛宕念仏寺を拝観。

申し込みは、はがきまたはFAXに見学会の希望日と住所・氏名・年齢・電話番号を書いて博物館まで。拝観料要。定員40名。

申込締切5月9日(金)必着。多数抽選。

催し物のご案内

博物館トーク

4月20日(日) 午後2時～3時

「民具の機能と心象世界―箕を中心に―」

当館学芸員 藤井裕之

5月18日(日) 午後2時～3時

「良寛の書」

当館学芸員 滝沢幸恵

6月15日(日) 午後2時～3時

「大阪万博の推進運動」 当館学芸員 田口泰久

歴史講座

5月17日(土) 午後2時～3時30分

「淀川往来―落語「三十石」を題材に―」

当館学芸員 田口泰久

5月24日(土) 午後2時～3時30分

「新芦屋古墳―7世紀に築かれた古墳―」

当館学芸員 藤原 学

5月31日(土)

「7世紀の吹田」

当館学芸員 高橋真希

歴史講座・博物館トークはいずれも申し込み
不要 講座室 先着120名 聴講無料

旧西尾家住宅(吹田文化創造交流館)イベント

春の大茶会

4月27日(日) 午前10時～午後3時

主屋の大座敷を使って、春の大茶会を開催します。茶道を知らない人も気軽に楽しめます。
費用は250円 申し込み不要 先着100名

端午の節句フェスタ

4月24日(木)～5月6日(火)

午前9時～午後5時

主屋座敷や計り部屋に五月人形や鯉のぼりを
展示します。

無料 申し込み不要

旧西尾家住宅へのアクセス

吹田市内本町2-15-11

電話 06-6381-0001

最寄駅 阪急吹田駅から徒歩約10分

JR吹田駅から徒歩約10分

その他 休館日 年末12月29日～1月3日

開館時間 午前9時～午後5時

駐車場なし

次回展示予告

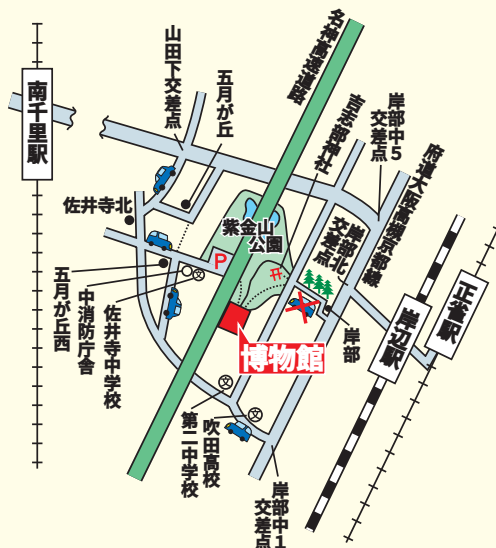
平成20年(2008年)度 夏季展示

「千里の竹」

会期 平成20年7月5日(土)～8月31日(日)

竹は、しなやかさと丈夫さから、籠やざるなどの生活用品、竹とんぼや竹馬などの玩具、また尺八や笛などの材料として使われてきました。この展示は、日本人の生活のなかにとけこんできた竹の文化を紹介し、竹の特性や今後の活用について考えようとするもので、竹林の環境整備活動をされている市民とともに準備を進めています。

交通案内



●JR岸辺駅下車徒歩25分

●JR吹田駅・阪急千里線吹田駅から

桃山台駅前ゆき、山田樫切山ゆきバス「佐井寺北」

下車徒歩10分

千里中央ゆき、阪急山田ゆきバス「岸部」下車徒歩10分

●JR吹田北口から

五月が丘南ゆきバス「五月が丘西」下車徒歩7分

●阪急千里線南千里駅から

JR吹田ゆきバス②、③系統「佐井寺北」下車徒歩10分

●車で来館は佐井寺北、五月が丘方面からお願いします。

●開館時間

午前9時30分～午後5時

●休館日

月曜日、祝日の翌日

12月29日～1月3日

<http://www.suita.ed.jp/hak/>

吹田市立博物館だより 第33号

平成20年(2008)3月31日発行

吹田市立博物館

〒564-0001

吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL.06 (6338) 5500

FAX.06 (6338) 9886